図書館報

聖隷クリストファー大学

第11号　2013.4

- 図書館雑感（川村 佐和子）……1
- 驚きと出会う（太田 貞司）……2
- 新しい図書館を活用して、自立した学修者になろう（藤原 百合）…3
- 図書館リニューアルオープン……4
- この一冊……6
- News……8

図書館雑感

大学院看護学研究科　教授　川村佐和子

この原稿をお引き受けして　本当に後悔した。忙しくて原稿を書けないとか　書くほどの内容がないとか　そんなことではない。最後に図書館に行ったのは何時だったかを思い出せない、それほど図書館を利用したことがない怠惰な自分に気がついたからだ。

一方　図書館という言葉を聞くと　なぜか嬉しく楽しい気持ちになる。なぜだろうか。図書館を利用した記憶は中学生の頃に戻る。私は医院も本屋もない辺鄙な村の小学校から、都市部の男子校として歴史をもち当時男女共学に変更した私立中学に入学した。中学には村立小学校にはなかった図書館があり、たくさんの本が魅力を放っていた。

それまでに出会った本といえば、祖父の書棚にあった40巻ほどの明治文学全集だけであった。幸田露伴・徳富蘆花・徳富蘇峰・二葉亭四迷・尾崎紅葉・樋口一葉・与謝野晶子などが書いた文章は旧かな使いで、文字にはルビがふってあった。小学生の私は、それらを繰り返し読んだが，内容も分からず字面をたどっただけだったような気がする。

そんな中から、読んでいると光景が見えるような内容の本が目も眩むようにある図書館に出会ったのだから，放課後は図書館に通った。読んだ書名はシャーロックホームズ全集しか覚えていない。しかし、毎日、本を読みに来る感心な生徒と写っていたのだろうか。ある日、校長が傍にこられて、君は毎日図書館で勉強していて感心だとほめてくれ、さらに、騒いでいる周りの声はうるさくないかと聞かれた。図書館では静かにするようにと言われた覚えもなく，自ら場を選べば、好きなように話し、笑ってよかった。私のように本に没頭していてもよかった。友人たちが「ここに書いてある！」と知識を得た喜びを発し、「この本とそっちの本と書いてあることが違う」「こっちの本とは同じだよ」という討論の声は遠方にあり、透明であって、耳障りではないと返事をした。私にとって図書館は友人たちの声も明るい環境の一部であった。

先日、図書館の一部にコーヒーショップを設置するなどして、学生の利用を促し自由に討論をさせる環境を整備するという内容を学習した。その工夫を否定はしないが、そこで話合われる内容がくつろぎのコーヒーショップと同じにならない仕掛けも必要ではないだろうか。図書館を知の世界を楽しむ空間にするためには、それを利用する者たちの知への渇望と十分な空間が必要であると考えている。

驚きと出会う

社会福祉学部社会福祉学科　教授　太田貞司

もう40年以上前のことになるが、私がまだ大学2年生で専門の勉強が始まる頃のことである。先生が最初の授業で、「驚き」「驚異」の意味のギリシャ語θαυμάζειν（タウマゼイン）を黒板に白墨で大きく書いた。知的探求の始まりは「驚き」だと言って、それが知の始まり、哲学の始まりだと説明を付け加えた。その時はよく理解できなかったのだが、日常の中で、「いやどうもこれは変だ」という問い、「驚く」力を身につけることこそ、学ぶということかと、本当にうっすらだが判った。そして、その力を養うには本を読むことで、図書館利用を勧められた。

たしかに、「いや、中にかなんでこう考えるの」と思うような本もある。知らないことを知るための読書も大切なのだが、「いや、中にはなんでこう考えるの」という問いが「智」であり、それを得るのが図書館の利用の醍醐味のひとつでもある。

他にも利用の仕方があることをその後知るようになった。図書館利用者はいろいろで、それを眺めているだけで実に楽しく、その人たちの姿から学ぶことも多い。とても“勉強”になる。中には記憶に残る人も少なくない。

そのひとり。図書館に行くと、ある時期になるといつもその人がいて、毛むじゃらの髭で、いかにも野性的な風貌で、図書館にはとても似つかわしくない人だった。時々、ふと空を見上げるといった調子で、その姿が今でも忘れられない。その彼とは、一度も、言葉を交わしたこともなかったが、動物学関係の本を読んでいるので、その分野の人だということが何となく理解できた。

フィールドに出かけない時は、ああして本を読む生活をしているのかと、その人の人なり、生活の様子、研究への構えを知ることができ、こうした人もいるのかと、いつまでも記憶に残った。「人」のスタイルを学んだ。ずーと後のことだが、その彼がヒグマの研究者になったことを知った。

これまでいろいろな図書館にお世話になった。ネット時代となり、その便利さも知ったが、やはり我々世代は紙の本がある図書館がよい。でも、『広辞苑』によれば図書館は、libraryの明治中期の頃の訳語。図書・記録その他の資料を収集・整理・保管し、必要とする人に利用してもらう施設という意味とされた。だからなにも本を読むことだけが目的ではない。“図”書館なのだから、図を見る施設でもある。

そう考えると、図書館にはいろいろな使い方があることが判る。この人はどういう生活をし、何を考えているのかを考えながら、人を、ただ、ぼーと眺めているだけの利用方法もある。それがまた実に楽しい。

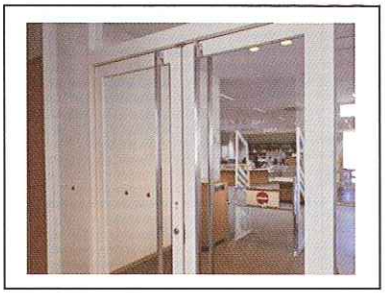
ブラウジングコーナー　（2階フロア）

ソファーでくつろぎながら、新聞や以下の一般雑誌を閲覧することができます。

- AERA
- an・an
- オレンジページ
- 科学
- 考える人
- 現代思想
- 信徒の友
- ナショナルジオグラフィック（日本版）
- Sports Graphic Number（ナンバー）
- 日経サイエンス
- 日経トレンディ
- 日経PCビギナーズ
- 百万人の福音
- 文藝春秋
- yom yom

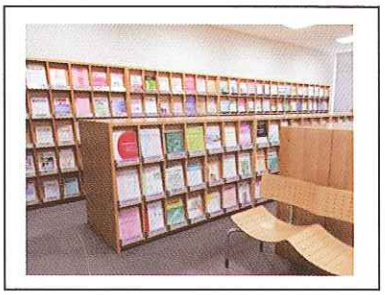
2F

図書館入口



新刊案内・検索台

新着雑誌



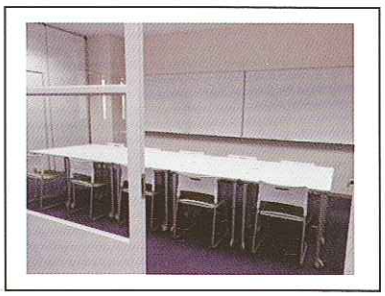
ブラウジングコーナー

雑誌を見ながらリラックス

ラーニングコモンズ

ディスカッションできます

グループ学習室



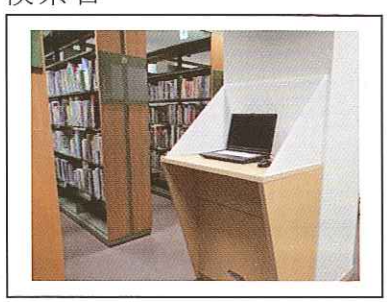
予約して利用してください。

3階閲覧室

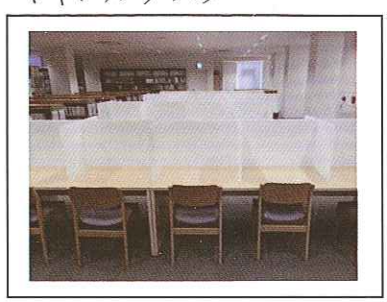
静かに集中して学習できる空間です。

3F

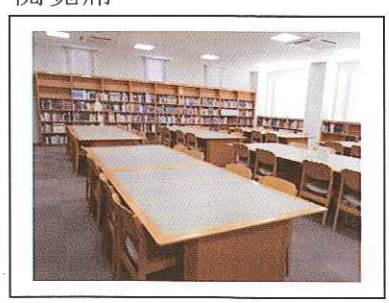
検索台



キャレルデスク



閲覧席



この一冊

本学教員からのお勧めの一冊

（五十音順）

笹原留似子著 『おもかげ復元師』 ポプラ社

著者である笹原さんは納棺師。故人を安らかな姿にして棺に納めることを仕事としています。残された家族が、再び生きる力を取り戻すために出来ることはあるのでしょうか。静かに問いかけられる一冊です。

（看護学部看護学科　助教　伊藤純子）

青年海外協力隊幼児教育ネットワーク編 『おおらかがいっぱい - 途上国を見てきた保育者からのメッセージ - 』

青年海外協力隊の幼児教育隊員たちが、途上国の幼児教育に関わりながら感じていく家族の絆の強さや、途上国の子育てに焦点を当てながら紹介しています。また、協力隊の活動や、帰国後途上国での経験を日本でどう活かしているのかも紹介しています。ドミニカの隊員が浜松で無認可保育園を起業する話もあります。さまざまなおおらかがいっぱいあるちょっとほっとする本です。

（社会福祉学部こども教育福祉学科 助教　坪川紅美）

ミシェル・レミュー著　森絵都訳 『永い夜』 講談社

誰もが一度は考えたことがある不思議、「死んだら魂はどこへ行くの?」「永遠の果てはどこ?」などを、少女と犬が眠れない夜に物思うこととして、シンプルな挿絵と文で描かれてます。

深く考えると怖くなったり寂しくなったりして、結局はっきりした答えはないのだけど、でも人間は愛おしいなぁと思える大人の絵本です。

（看護学部看護学科 准教授　豊島由紀子）

守口奈緒美著 『変光星』 花風社

高機能自閉症である著者による幼年時代から中学時代までの手記です。感じ方や理解の仕方が当事者から語られることによって、自閉症者の特徴を具体的で分かりやすく理解することができます。しかし、それ以上に学校での痛々しい体験などから著者の辛く苦しい気持が伝わってきます。この本に限らず、当事者の手記を読むことは、皆さんが今後仕事に就いた時に、きっと役に立つことと思います。

（リハビリテーション学部言語聴覚学科　助教　中村哲也）

サン=テグジュペリ著 『星の王子さま』 岩波書店

星の王子さまは福島を語る

「星の王子様」はフランス人、サン＝テグジュペリによって書かれた物語で、250以上もの言語に翻訳され、年間売り上げが1億冊を超える世界的ベストセラーです。物語は、ある日飛行機が故障して砂漠に不時着し、ヒーローが生死の境を彷徨うところから始まります。物語が書かれた当時、つまり20世紀前半は、最先端の技術といえば飛行機でした。飛行機が墜落したのはサハラ砂漠。道はおろか、希望も何もないと思われる場所でした。

福島で起こった原子力災害を「星の王子様」になぞらえるのは、それほど的外れな話ではないでしょう。むしろこの物語こそが、日本人と現代社会へ希望のメッセージを伝えているように思います。暗闇の中にいる今だからこそ、自分の内面を深く見つめることで、心の中に輝く星のような自分を発見できるかもしれません。あなたの中にも星の王子様がいて、きっと進むべき道を示してくれるはずです。

（社会福祉学部社会福祉学科 准教授　ポルドゥニャック・アダム）

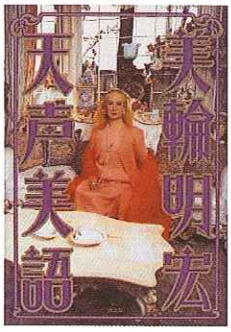
土井英司著 『20代で人生の年収は9割決まる』 大和書房

20代は社会人としての『仕込みの8年間』です。20代の働き方は、効率を優先するのではなく、しっかりと土壌を耕して強い土壌をつくって種をまくような、本質を追及する働き方が人生を大きく変えます。人に言うのは簡単ですが、自分が20代の時にそんな生き方ができていたかどうか…。

（リハビリテーション学部理学療法学科 准教授　吉本好延）

この一冊

本学教員からのお勧めの一冊



美輪明宏著　『天声美語』　講談社

皆さん、『ヨイトマケの唄』をご存知ですか？昨年末の紅白歌合戦で話題を呼んだ美輪明宏氏の歌です。
私がおすすめするのは彼(彼女？)の著書『天声美語』です。どのページからでも読めます。最近、生活が砂漠化している」「心のビタミン剤がほしいと思う方、手にとってみてください。同氏の著書『ああ正負の法則』も、あわせておすすめします。

(リハビリテーション学部作業療法学科 学生　大場里美)

News

- 図書館サポーター制度を始めました。
  フロアにいる図書館サポーターがあなたの図書館活用のお手伝いをします。気軽に声をかけてください。「この一冊」(p.8)の執筆者の大場里美さん(リハビリテーション学部作業療法学科)も図書館サポーターです。
- 製本雑誌過去7年分(以前は、過去5年)を開架書架に配架しました。
- キャレル席(個人用ブース席)や閲覧席が約1.8倍になりました。
- 3階には検索台が2台あります。
  階段付近と書架の間にあり、検索しながら本を探すことができます。

図書館は公共の場です。マナーを守ってお互い気持よく利用しましょう。

図書館報　第11号/発行・聖隷クリストファー大学図書館/2013年4月1日
〒433-8558　静岡県浜松市北区三方原町3453/TEL:053-439-1416/FAX:053-414-1146
E-mail:cl-library@admin.seirei.ac.jp　図書館ホームページURL:http://collib.seirei.ac.jp/